

六 日本降伏、それに続く私の苦難

日本の敗戦、独房へ

それは力の真空状態といってもよかった。町は“三つ星”の兵隊たち[マラヤ共産党系のマラヤ人民抗日軍、華人中心]によって制圧されていた。中国人ゲリラは日本人を相手に立ちあがっていた。彼らは武装完備でジョホール州のジャングルから姿を現した。そして町中は周章狼狽、恐怖に襲われ、掠奪がほしいままになされた。日本軍と協力した者、少しでも彼らのために何かをした者たちの生命は、空前の灯であった。拷問が行われ、屈辱が加えられた。1日また1日とそれはひどくなった。

“三つ星”が親日派を捜索しているという噂が流れた。私はずっと家にこもっており、診療所も、英軍のグルカ兵やインド人兵士たちが到着してゲリラに降伏を迫るまで、約1ヵ月の間閉めたままだった。ゲリラはしぶしぶ武器を捨てた。この“三つ星”軍の本営は、私の診療所から1キロほどのセレギー街にある元日本人クラブの建物だった。私と妻と2人の娘たちは、そこから5キロほど離れたセラングン街にじっと身をひそめていたが、緊張がようやくおさまると、半日だけ、こわごわ診療所を開いた。

しかし私は、髪の毛も逆立つ思いであった。妻はいつも私と一緒に人力車で同行した。この三輪車の運転手は、私たちがシ・パンジャン(のっぽ)とあだ名した男で、いつも義母がマーケットへ行くとき乗せて行った男だった。妻は私を一人で診療所へ行かせる気にならず、何週間も私にいつも同行してくれた。私がそんな必要はないという、妻の答えは、「撃たれたら一緒に死にましようよ。まだ油断できないわ」というのだった。私は妻の言葉に打たれ、返す言葉もなかった。私はまだお尋ね者になっている、と私は悟った。妻はおそらくどこかでそういう噂を耳にしていたのだろう。彼女はそれを自分ひとりの胸におさめていたのだった。まさに“未成交響曲”であった。

私が恐怖と不安にさいなまれながらも診療を続けているうち、何ヵ月かが過ぎていった。その間に、インド国民軍将校、警察官、通報者、対日本軍協力者をはじめ大勢の者が、裁判もなしに投獄されたという噂が流れてきた。私はいずれは自分の番が来ると覚悟をきめた。それは1946年4月初旬のことであった。私は自分の診療所から2、3マイル離れたラヒム博士の診療所を訪ねた。そして彼と私が立ち話を始めた。とたん、表にジープが止まり、英国兵が2名飛び下りると、私の名を呼んでずかずかと診療所へ入ってきた。そして私にロビンソン街の刑事犯捜査局—また以前のところだ—に来よう命じた。そこで私は英国人将校の前へ連れて行かれ、彼は2人の兵士に私を日本軍協力者として取り調べを行うよう命令した。

尋問はごく短時間だった。テーブルの上には7年前にも私の眼前につき出された濃灰色の

アルバムが置かれていた（よく覚えていたものだ…）。

問 「日本に行ったことがあるね。」

答 「はい、あります。」

問 「どのくらい滞在したのか。」

答 「6年間です。」

（アルバムは一ページまた一ページとめくられていった。在日留学生会サレカット・インドネシアの写真、会の指導者プルワダルミンタ先生の家での集会の写真、来日したパリンドラ党党首ストモ博士の写真などなど）

問 「日本で何をしていたのか。」

答 「医学を勉強していました。」

（ここで彼が開いたページには頭山満翁がスジョノ氏、スミント・ユスフ氏と私と一緒に写っている写真があった。）

問 「この男を知っているね。」

答 「(私のはぞき込んで答えた) はい、知っています。」

問 「何か演説をしたかね。」

答 「(思い出しながら) はい、しました。」

そこで英国人将校は、2人の憲兵に、私をアウトラム街の刑務所に連れて行けと命令した。誰かがこのアルバムをオランダ領事館に渡し、それがこのイギリスの刑事犯捜査局に回されたのだ。

「帝国主義国が2つも寄ってたかって私を捕えるなんて、私はそんなに危険人物なのだろうか。私はマレー人のいう“大海原のたったの一滴”にすぎないのに」と私は思った。

遂に2人の“青い目の兄弟”は成功した。私は対敵協力者として投獄されたのである。

私が鉄扉の中に入れられたのは午前11時頃だった。ジョハリと名乗る看守が何か差し出すべき所持品はないかときいた。私の持っていた小銭とハンカチ1枚が当局の預るところとなった。太ってがっしりとした体躯のベンガル人巡査が、私を第92号房へ連行した。1階だった。この部屋の大きさは、前に入れられた6号房とほぼ同じで、ちがう点は床から50センチのところの柱に横板が張り渡されていることだった。枕は丸い木材だった。以前の部屋より少しばかり暗く、蚊や南京虫は同じだった。鉄の扉がガチャンと閉められた。

一人とり残された私は、あたりを見廻し、床に座って壁にもたれながら、家族の住まうセラランゴン街の方向に目をこらした。アムナ、マスニアと妻の姿がはっきりと目の前に浮かんだ。「いまごろ子供たちはお昼を食べている。アスナが(彼女はビービーと呼ばれていた)子供たちに食べさせてやっている」と私は一人思った。子供たちのことを考えている私の耳に、突然ベルの音がひびいた。何のことも分からないでいると、数分後にマレー人看守がドアを開けに来た。服役者はみなドアの前で気を付けの姿勢でいる。昼飯を食べに行くのだった。12時半ちょうどだった。私たちは床に座って米と野菜と魚の食事をあてがわれた。そこに

はインド国民軍の高級将校たちが8人いた。モハン・シン中佐もいた。警官が10人、その中にはサピシュ、ロドリゲス、フセイン・アルサゴフ氏がいたし、中国人の有力者たちが8人(クワ氏、リム・チョン・パン氏など)、インド人有力者たちが7人(その中には法律家のゴホ氏も)、混血人たちの指導者はパグラー博士を含めて5人、マレー人指導者6人の中にはマレー語の日刊紙「ブリタ・マレー」のサマド・イスマイル氏、同じくラムリ氏がいた。一方、アラブ人たちの中の有力者はひとりも見えなかったし、マレー人の中もトゥンク・フセイン(会長)、イブラヒム・ヤコブ(義勇軍大佐)、カリム(義勇軍大尉)、「マラヤの分裂を策している」として訊問されたとき篠崎氏の通訳をしたオマン・ハジ・シラジ(マレー人厚生協会の有力者)その他の委員達の姿も見当たらなかった。「いったい彼らはどうなったんだろう。釈放されたらインドネシアとマラヤは彼らにとって最も安全な場所だということを理解しなくては」と呟いた。マレーの諺には「男のコックは決して走らない」というのがある。

私たちは互いに言語を交すことは許されなかった。昼食後は30分間の休憩が認められた。それからまたベルが鳴り、私たちは行進して2時には鍵をかけられた。4時になると、重い腸といっぱいの膀胱を解放させることができる時間だった。小便器はそのときから翌朝まで独房内におかれる。苦しかったのは、かつての第6号独房のときと同じように、真夜中にはらわたが互いに喧嘩をしだしたことである。これは毎晩のことだった。今度は以前のときよりきつかった。医者である私は、次の諺を思いだした。「たとえ毒でも、毎日少量ずつ用いれば、やがては薬となる。」

私はいつ就寝時間がくるのかわからなかった。あくびが出て眠くなれば寝るのだったが、固い木の枕はどうにも痛くて眠れなかったので、両腕を枕がわりにし、うつむけになって寝た。幸いシャツの袖もズボンも長かったので、寒さも防げ、蚊や南京虫にやられることも少なかったが、思いは家族の上に馳せて到底眠るどころではなかった。食べる物に困ってないだろうか、買物する金はあるだろうか、おしゃべりのアムナや、毎晩私がミルクを用意してやったマスニアが、「パパッ(お父さん)はどうして帰ってこないの。いつ帰ってくるの。」と聞いたとき、ビービーは何と答えるのだろうか。毎日毎晩、独房の壁ばかり眺めていたら私は気が狂ってしまう。もう何の役にも立てない人間なのだ。私は自分の気持ちを明るい方へ向けようとした。何らかの希望と幸福と勇気とを引きおこすために、私はスカルノ大統領の言葉を思いだした。「ラジオで重要ニュースを聞きなさい」とスカルノ大統領は言った。そして実際スカルノ、ハッタ両指導者は、インドネシアの独立を宣言したのだった。それを思うと暗い独房の中の私にも希望と幸せな気分が湧いてきて、熱帯の澄み切った空の下に、赤と白のインドネシア国旗がへんぼんと翻る光景を目の当たりに見る思いだった。私の耳の中では、民族歌インドネシア・ラヤが鳴りひびいていた。

私は「青年の誓」以後38年間にわたる辛酸の末に、とうとう独立の夢が叶った6000万のインドネシア人が、どんなに喜んで独立を祝賀しているかを思い描いた。言い知れぬ犠牲の

歳月の末にアッラーの神のお恵みで長い間の希望がかなえられたのだ。私は自分自身に「自分もその中で何らかの役割を果たし得ただろうか」と謙虚に問いを發してみた。それらの答はなかった。しかし32号の暗い独房は前より明るくなったように思えた。3メートルと3.5メートルの狭い独房も、アチェからメラウケまでの全土はインドネシア領土となり、私自身はその中で、誇り高く、威厳にみちた、光榮ある人間となった。私はもう英軍の法廷で何年もの長期刑をいい渡されても意に介しないという気持ちになった。これは私が、オランダ抜き英帝国に一人で対決する事態といえた。

日本留学時代の思い出は、この独房の暗黒の中に明るい楽しい光をともした。もう独房は暗くなかった。上野桜木町、銀座の人通りの中のレストラン、商店のショーウィンドウ、歩道の夜店などが目の前に美しく現れ、日比谷公会堂での大亜細亜大会での拍手喝采を耳にし、日本文化連盟、アジア関係の諸集会の熱気ある雰囲気を感じるかべ、また慈恵会医科大学での忙しかった日々をまざまざと思いだした。私の身体は小さな32号独房にあったが、心はそこに閉じ込められてはいなかった。この変容は、私を気落ちと悲観と精神的苦痛から救ってくれた。気狂いになるなんて。何の役にも立たない人間など、もうそんなことは思いもしなかった。

1946年5月終わりの午前10時ころ、看守が来て私に事務所に来るようにと聞いた。私はすぐ、ああ法廷からだな、今度は私の番か、と思った。だが私は何の感情もあらわず冷静を保っていた。事務所までの通路を半分ほど行ったところで看守は、妻が子供たちを連れて面会に来ているのだと知らせてくれた。

集会室はまるで檻のようで私たちは鉄柵へだてられ、約2メートルの距離をおいて向かいあった。妻—私はいつも彼女をビーと愛称で呼んでいた—はマスニアを左腕に抱き、右手はアムナの手をしっかりと握っていた。私は涙をこらえるため、わざと低いとぎれとぎれの声で、「どう。大丈夫」と聞いた。ビーは悲しげな顔でうなずいた。「ビーは大丈夫。アムナとマスニアは。」と私はまた聞いた。そして無邪気な子供たちを見ながら「お父さんだよ。ほらお父さんだよ」と呼びかけた。アムナは私をじっと見つめた。彼女の眼はまっかだった。マスニアはちょっとはずかしそうに私を見た。妻は彼女に「ニア、ほらお父さんよ、お父さんよ」といった。ニアは悲しそうに私を見た。私は母の様子を尋ねた。「お元気です」とビーはいった。私が拘禁されたニュースはかなり遅れてイブラヒム博士から知らされたとのことで、イブラヒム博士の息子の弁護士をしているアーマッド氏が、面会許可をとってくれるにも2週間かかったということだった。「2日まえに許可がありました。ウダ(妻は私をこう呼んでいた)に食べ物や着物を持って来ようと思ったのですが、許されなかったのです。いつも面会許可を得るには2週間かかるのですって」と彼女は言った。私は彼女に、どのようにしてここまで来たかときくと、シ・パンジャンの人力車で来たと答えた。

20分間の面会時間はあっというまに過ぎた。看守が時間切れを宣告した。私も妻も思わずどっと涙があふれだした。アムナもニアも悲しそうにじっと私を見つめた。別れの何とつ

らかったことか。

「子供たちのことをしっかり頼むよ」

と私がいうと、妻も

「はい、大丈夫です。ウダも気をつけて」

と言った。

私はようやくの思いで足を引きずるようにして踵をかえした。心臓が子供たちと妻の方へ引っぱって行かれるようだった。私は自分の房に帰ってからも、子供たちが別れに振った手が目の前にちらついていた。それは1946年5月の終り頃だった。

それから10日ほどたったのち、妻がまた訪ねてくれた。今度は2、3の衣類と毛布、ハンカチ、歯みがきと歯ブラシなど持参だった。子供たちは相変わらず悲しげだったが、前の時より表情に動きがあった。アムナが言った。

「お父さんはいつ家へ帰るの。早く帰ってよ。」

私は「もうすぐだよ」と答えた。ニアの方はまだじっと見つめているだけだった。妻は、看守にはりんごを5個あげたと言った。そのりんごは、ベチャ引きのシ・パンジャンがくれたものだった。まだ食物の差入れは許されてなかったのだ。「かまわないよ」と私は答えた。今度も20分間はまたたくの間に過ぎた。看守はあとで私にりんごを渡してくれたが、シ・パンジャンの甘いりんごは独房の中で私のかわきを十分にいやしてくれた。

最後の3回目の面会は7月初旬だった。妻にとって面会はよその家を訪ねるようなものになっていた。アムナもニアも元気に嬉しそうだった。家族が健康でいることは私にとって何よりも嬉しいことだった。アムナはまた私にいつ家へ帰ってくるの、と聞いた。答はまた「もうすぐだよ」だった。妻は新しい服を持ってきて古いのを受け取り、チョコレートとぶどうの入った箱を看守に渡した。「これはムルチャンドからウダにとって下さったんです」と妻はいった。ムルチャンドは近所に住むインド人ブブの16歳になる息子だった。「ムルチャンドによろしくね」と私はいった。

ニアは手を母に支えられて別れの挨拶をし、アムナはしっかりと、にこにこしながら何度も手を振りながら私を見送った。空っぽの胃袋にチョコレートとぶどうが何とおいしかったことか。私はそれらを少しずつ何日にもわたって楽しんだ。

シ・パンジャンとムルチャンド、彼ら中国人車夫とインド人少年の心づかいと親切は本当に嬉しく有難かった。私のような境遇になると遠くの親類より近くの他人という諺がしみじみ分かる。彼らはいつも「ガウス先生はいかがですか」とたずねてくれ、2ヵ月半ほど刑務所にいた方が、外で自由でいるより、私にとっては身の安全がはかれる、といったものもあった。というのは、ある民族集団の私に対する憎しみがきわめて強かったからである。外にいればいつ撲り殺されるかもわからない。セラングン通りからミドル通り、あるいは大通りを歩いているときに何があっても驚くことはなかった。私の義弟のアジズさえ、1946年頃のパカンバルで私がもう死んだという噂を伝え、それは故郷パリアマンにまで拡がっていた。

というわけで私は、今度の場合、私を投獄した英国官憲に感謝せざるを得なかった。生命拾いさせてもらったといえる。長生きしたいと思う。

毎日刑務所のバランスを欠いた食事を2度ずつ食べていた私は、そのうち何か脚の状態が変なのに気がついた。足がだんだん重くなり、手足がときどき麻痺し、水ぶくれになってきた。すぐ疲れるし呼吸困難もおこした。脚気だと私は悟った。これは徐々に死に至る病気である。私はこれに罹っているのは私だけだと思っていたが、他にも重い症状を訴える者たちがいた。医者はいないのだろうか。刑務所の区画と離れた広間の方には病人が並んで寝ていた。

ある朝10時半頃、看守がきて私に病人を診るようにといった。私は何も持っていなかったが、承知していくと、病人は警察のロドリゲス氏で、ベッドの上に顔も腹も手足もすっかりやつれて横たわっていた。呼吸は荒く、脈も弱かった。肝臓もふくらんでいない。戦争中は脚気が蔓延するのは私が経験したところだ。私は彼は脚気であると診断した。そして担当官にビタミンBの大量投与を勧めた。ロドリゲス氏はよく私と口も聞いたが、もう2週間も姿を見せなかった。脚気にかかってからもう3週間にはなっているのだろう。刑務所の皆がロドリゲス氏が脚気で死んだと知るところ、私も同じ運命を辿るのだろうか、どうして担当官は彼を病院に送らないのだろうか。私自身はこの脚気から脱する道は何もなかった。医者はもちろん薬も何もなかった。私は思った。

「もし運がよければ生き残れるし、運がないならすべてをアッラーにおまかせしよう。私の運命はアッラーの御手にある。」

自由の身になって

1946年7月半ばのある日の午後10時、私は罪状も何もきかさされずに2ヵ月半も投獄されたのちに、突然釈放された。私は衣類と毛布とタオルをひとまとめにした。ハンカチと2ドル紙幣が私に手渡された。私はジョハリ氏とベンガル人巡査に礼を言って外へ出、人力車を拾った。セラングン通りまでは、芝・御成門(慈恵会医科大学の所在地)から新宿くらいの距離だが、車夫は2ドルでいいといった。妻は釈放のことを知らず、私が脚気のことも知らなかった。街はいつものとおり人がいっぱい、それぞれがいつものながらの日常生活を営んでいた。11時頃に家に帰りついた私は車夫に2ドルを支払い、ドアをノックした。戸を開けたのは妻だった。それは何という喜びの再会だったことだろう。彼女はあふれ出る涙をおさえようとしたができなかった。彼女が下を向くと涙がこぼれ落ちた。私も同じだった。私は彼女をいたわりながら一緒に2階に上っていった。義母は私にその手にキスすると涙を流して喜び、2人の娘アムナとニアも「お父さんが帰った。お父さんが帰った」と叫びながら飛びついてきた。私は子供たちを抱きしめ、キスし、頭をなで、両腕で2人を抱き上げた。そこで妻は私に黄色い米をふりかけた。それは魂と身体を潔めるためのしきたりであった。私はお風呂に入るようにと勧められた。風呂にはコーランの語句を書いた花びらがたくさん

浮かんでいた。そして私は罪から自由になり保護されたのである。

愛する子供たち、妻、そして義母と別れていたのはわずか2ヵ月半であったが、私にはそれは2年半の年月のように思われた。

「留守中に誰か私のことを心配して訪ねてくれた者はあったかい」と私はまず妻に聞いた。「私はあなたが戦争中に大勢の人を助けてあげたことを知っています。でもその中の誰ひとりとしてあなたのことを心配してききに来た人はいませんわ。あなたの身内すらも誰も来ません」と妻は答えた。私は彼女に、誰でも巻きぞえになるのを怖れているのさ、といった。当時の状況下では、誰にしろ、自分の身の安全をはかることで精一杯だったのだ。

「あなたが刑務所に連れていかれてからすぐニアがお腹をこわしたんです。それで5軒先のメノン先生に診ていただきました。それが分かったのは1週間後だったので、私はすぐ先生に手当の仕方をうかがいました。」

「ウダ、あなたが撲り殺されて、死骸が街にござか新聞紙をかけて放り出されているって噂もありました。ジャラン・ブサル（そこではよくジャワからの労務者が死んでいた）にはいくつかそんな死体がありました。それで友達のレナと一緒に、ニアを抱きアムナの手を引いて探しに行ったのです。3つか4つ、新聞紙やゴザをめくってみました。でもウダはいなかった。それから4、5日して私は、今度はニアは家に残しアムナだけ連れてファレール公園にも探しに行ったんです。そこでもウダは見つかりませんでした。そのうちイブラヒム先生の診療所からウダが刑務所へ入れられたって知らされたのです。」

暑い太陽のもと、人びとは飢えかわいていた。

1946年の末、母が突然パリアマンから訪ねてきた。私たちはセラングン街からミドル街に移っていたが、私が一人にいるときに突然母があらわれたのである。母は私を見ると走り寄って抱きしめ、泣きながら「お前は死んだと思っていたんだよ」と何度も繰り返していった。私もすすり泣きしながら、

「お母さん、僕は生きてますよ。ここに、あなたの前にいますよ。生きていますよ」と言った。

「ガウスや、パリアマンではみながお前は撲り殺されたっていうんだよ。それで私はお前の葬式を出そうと思ったのだけどね、近所の人たちに止められて…噂を信じちゃいけないって。そしてシンガポールへ行って確かめてこいっていわれたのさ。それで自分で確かめにやってきたんだよ。」

と母はいった。私は母を2階に案内し、妻と2人の子供たちに引き合わせた。私たちが座って落ち着くと母は、その噂はパカンバルに始まって、ある商人が広め、ブキティンギからパリアマンにまで伝わってきたのだと説明した。「誰か商人の中に私が戦争中に助けなかった者があったんだろうか」と私は自問自答した。母はついに打ち明けて、それを広めたのは義弟のアジスだといった。アジスは私の義弟でロハニの弟である。あのアジスが…と私はひどくがっかりした。「そうなんだよ、アジスはミナンカバウに商用で来る。その噂はパカンバ

ルから始まったんだよ。お前が撲り殺されたという噂は…」と母はまた泣きはじめた。義弟が私に対してそんな深い恨みを抱いていようとは、考えられないことだった。

母は5ヵ月ほど私のもとですごし、1947年4月の初めにパリアマンに帰っていった。私がおもっと逗留するように勧めると母は、「あの大きな家を誰が見るんだね。手を入れないとくさっちゃうよ」といった。母は、ブラス・バサ街に食堂を営むサムスティン氏と一緒に木造船に乗って故郷へ戻っていった。パリアマンまでは10日の旅だった。55歳の母はさぞ疲れたことだろう。1915年、私が5歳のとき夢の中で泣いたことは、こうして1947年に正夢となったのである。

1946年10月のある日、英国人憲兵2人を乗せたジープが私の診療所の前でとまった。私は彼らがジープから跳びおりるのを見て一瞬考えた。「何のためにやって来たのだろうか。私を投獄しただけでは満足できないのか。次には何が起こるのだろうか。」彼らは診療所の中へ入ってきた。私は診察室を出て部屋の前で彼らに会った。彼らは私と握手をして名を名乗った。私は彼らに椅子を勧めた。その中の1人が私にいろいろと尋ねた（私の記憶するかぎり質問と答は次のようであった）。

問 「先生、その後いかがですか。」

答 「元気です。」

問 「診療所の方は。」

答 「うまくいってます。」

問 「拘禁されたと聞きましたが。」

答 「その通りです。」

問 「刑務所ではどうでしたか。」

答 「大丈夫です。待遇はOKです。朝と昼には食事が出て、正午には30分間の自由時間がありました。」

問 「食事はどうでしたか。」

答 「まあまあです。昼には魚のカレーが出て、時には肉入りカレーに野菜がつけました。朝は乾魚と粥でした。」

問 「味はどうでしたか。」

答 「まあ悪くはありません。」

問 「何か不満は。」

答 「ありません。」

そして彼は刑務所で死者が1人出たと言った。私はあのロドリゲス氏を思い出した。

問 「その死因は何だったでしょう。」

答 「私の見解では脚気だと思います。」

彼はそれはいけない、と言った。

問 「食事が原因でしょうか。」

答 「そうだと思います。」

問 「ほかにも脚気の患者はいましたか。」

答 「いました。」

彼はまた、それはいけないといった。

そして2人は私に礼をいって帰っていった。その面会は約20分のもので、医学的に気持のよい質問応答であった。私は彼ら2人の訪問の目的は、ロドリゲス氏の死因を聞きだすのとは別のところにあるような気がした。多分、私の投獄に対する反応や、その後の活動について探りにきたのだろう。つまりミナンカバウ風にいえば「水牛には鋭い角がある」というところである。

人びとは私が軍や政府の監視のまどになっていることを知っていた。私は英軍政府の判決を静かに待つのみだった。私の犯行は何の部類に入るのだろう。ジープが診療所の前に止って将校が2人跳びおりた。私はかつてもこういう光景をみたことを思い起した。あれはロホール街のイブラヒム先生の診療所の前のことだった。そしてそのジープは、1942年にはロビンソン街の第6号独房へ、1946年にはアウトラム街の第32号独房へと私を連行したのだった。

3週間前に英軍の憲兵2人が訪ねてきたときの不愉快な後味は、まだ私の中に心理的な衝撃を残していた。また英人の訪問である。だが今度大きな車から降りたのは、2人のネクタイをしたイギリス人であった。「また何のことだろう」と私は呟いた。2人の紳士は急ぎ足に診療所へ入ってくると、その中の1人が口をきった。

「ガウス先生ですか。」

「そうです。」

「われわれは総督の使いです。総督があなたにお目にかかりたいとのことで…一緒に来ていただけますか。」

「結構です。しかしこの服装で閣下にお目にかかるわけにはいきませんが…。」

私は白い長袖シャツに茶色いズボンという普通の服装で、ネクタイなどしていなかった。私がそう言うと彼は「そんなことはかまいません」といった。彼らの訪問には儀礼ばったところは何もなかった。立話のままで、何か急ぎの重要な話のようであった。私は車の後の席に座った。車の中では会話はかわされなかった。

「多分、私の日本滞在中の政治活動のことや、戦争中の対日協力や、現在の私の活動ことにインドネシアとマラヤの間に政治的な約束があるかなど聞かれるのだろう」と私は思った。

車は10分ほど走ったところで止った。総督府の建物の裏玄関だった。私が広間の中に入るとすぐフランクリン・ギムソン総督が一つのドアから出てきて、私たちは楕円形の大テーブルの端で握手を交わした。総督閣下は微笑しながら、テーブルの中央の席を私に勧め、自分はその前に座った。私は総督の座るのを待って自分も腰をおろした（以下は記憶の中の質問と答である）。

「いかがですか」(微笑みながら)。

「元気しております 閣下。」

「いま、診療所はどこですか。」

「ミドル街でございます。」

「いつからですか。」

「もう5年になります。」

「戦争前から開業してられるのですか。」

「さようでございます 閣下。」

「日本の学校の卒業ということですね。」

「はい、さようでございます 閣下。」

「事業はいかがですか。」

「うまくいっております。」

「あなたの出身は。」

「スマトラ西岸でございます。中学はパダンで、高校はバタビアで終えました。それから日本へまいりました。」

「シンガポールにはお国の人は大勢いますか。」

「シンガポールにいるインドネシア人は約3万5000人でございます」(インドネシアという言葉をきいて総督の顔付きが変わった)。

「マラヤには30万から40万ほどおります。」

私がそういうと総督は顔いて

「マラヤに30万から40万。大変な数ですね」といい、その数を繰り返して口にしながら微笑みを浮かべて私をじっと見た。

「どんな職業についているのですか。」

「ほとんどが労働者、小商人や食堂経営者などでございます」(私は総督がインドネシア社会の活動についてや、1933年の大亜細亜大会でのスピーチやサレカット・インドネシアなどのことを尋ねるかと思ったが、その予想は外れ、総督は、私に来てくれてありがとうと礼を述べ、握手をして(暖かい握手だった)別れを告げた。そこには会話を筆記する秘書もおらず、副官は総督の椅子から4メートルも離れた所に気をつけの姿勢で立っていた。総督は背が高く、青い背広に青いネクタイ姿であった。私は同じ車で送られて診療所に戻ってきた。

総督との会話はまことに気持ちの良いもので、私はいまだかつて英国の政府高官とこんな気持ちで会話を交したことはなかった。この突然の招請はどういう意味だったのだろう。会見は20分ほど、2人だけのごくくだけた雰囲気の中で行われた。英国人総督の微笑のかけには何かあるのだろう。

ギムソン総督閣下は戦前もシンガポール総督であった。私はその時代に日本から戻ってき

たのだった。おそらく総督は、1933年の末に私が日比谷公会堂で行ったスピーチのことを一そしてそれはラジオによって全国に放送された一東京のイギリス大使館やオランダ総領事館からロンドンの外務省に送られた書類によって知っていたにちがいない。もし、あの古い、茶色く変色したアルバムがロビンソン街の検察局にあったなら、あれも総督府にきているにちがいない。戦争初期、スマトラとマラヤは同じ軍政監部の管轄下にあった。総督は、マラヤの民族主義者が、同種で、同じ宗教をもつものがインドネシアに帰属したいと願っている動きを、よく承知していたはずである。この点で、同種であることは、大きな要因であった。

日本軍政下の3年半のあいだに、反英感情は最高潮に達した。そしてインドネシアの独立を渴望するインドネシア民族主義運動は、もう10年も以前から、マラヤ独立のための反英運動に大きな影響を及ぼしていた。私は総督と会話をしながら、私がこの地域で、憲法改正をめざすグループの中心人物と目されているという印象を受けた。その動きのめざましい第一歩は、イスタナ・カンボン・ダラム（リアウのスルタンの子孫であるトゥンク・フセインのもとの宮殿）で1946年8月17日に開催されたインドネシア独立一周年記念の行事であった。その式典では、赤と白のインドネシア国旗を掲揚し、国歌「インドネシア・ラヤ」が歌われた。そしていくつかのスピーチと祈りでしめくくられたその式典は、まことに印象的なものであった。私は残念なことに、この第1回の祝賀式には出席できなかった。刑務所から出てきたばかりで身体が衰弱しきっていたためである。

私は刑務所から釈放されて数週間たったのち、用心しながらイブラヒム博士を訪ねた。博士を私の事件の巻きぞえにしたくなかったからである。私は戦時中多くの人たちを助けたが、その大多数は、そして私の親類すら、私を訪ねて「いかがですか」といつてくれることはしなかった。訪ねてくれたのはほんの少数の人びとだけだった。それは皆、自分の身の安全のためであった。私は皆が私のしたことを忘れてしまったのに失望したが、それはミンカバウの古い諺の通りだった。「砂糖きびの中の甘味はしばらくとられて皮は捨て去られる。皮は歯を磨くのに使われ得る。橋を渡ると茎は破り捨てられる。だが茎は老年のよき友となり得る。」人生というものがどんなものかを、私はこの恩知らずの大勢の人びとに教えられたのだった。

イブラヒム博士は私に忠告していった。

「これからはすべてのことから手を引きなさい。人とつき合いなさるな。毎日の診察はして、診療所を閉じたら真直ぐに家へ帰りなさい。よほどの用でなければ、夜の外出はやめ、クラブやその他、政党にはもちろん、関わりをもたないことだ。何の役にもたない。いろいろな記念の会にも出ないように。そういう所に顔出しすると、面倒なことになり、評判が悪くなる。まず自分は身のことを第一に考えなさい。」

そして彼は、「人とつきあうのはやめなさい」とくり返しながら、右手で身ぶりをした。私はまだ監視されているのだな、と私は思った。

イブラヒム博士の忠告に私は心から感謝した。私はいまシンガポールでは新参者なのだ。イブラヒム博士は1962年5月に、メッカ巡礼中、聖地で安からに永眠された。

在シンガポール・インドネシア人の民族主義

私はその後も毎日診療に忙しかったが、心は故国からシンガポールにやってくる友人たちの伝えるニュースでかき乱されていた。インドネシア人はオランダ軍を相手に熾烈な戦いをつづけていた。インドネシアは1945年8月17日の独立宣言によって「事実上」の独立を勝ち得ていたが、人びとは「国際法的」にも完全な独立を目ざして戦い続けていたのである。爆撃、機関銃掃射、村落への放火、無辜の民の殺りく、虐殺等々。飢えに苦しむ人びとも多く、竹槍のみを武器として戦う愛国者たちは治療を受けることもなく死んでいった。医薬品も食糧も衣類もすべて不足していた。私は座視することができず、同胞の苦難を何とかなくてはならないと思った。そこで私たちは「インドネシア赤十字」という組織をつくった。会長には開業医のハッサン・アルジュニード博士をいただき、私は副会長になり、事務局長には弁護士のサアドン・ズビル氏(元ペナン州長官)がなり、会計は商人のムタリブ氏が担当した。そして委員には教師でミナンカバウの文化に精通したラシッド氏、船長のアダム氏、商人のハジ・マイディン氏、同じく商人のパク・パサク氏らになった。私たちはこの協会を、オランダ軍との戦争で苦しむインドネシア人を助けるためという目的を明らかにして、オーチャード街にあった英国赤十字協会に紹介して、英赤十字の指示と協力をとりつけた。

それは私たちにとって一つの勝利であった。私たちはオランダ側が英国側に通告して、わが協会の成立を認めさせないようにすることを危惧していたのだった。事務所はロチャール街のハッサン・アリジュニード博士の診療所においた。その間私はたてつづけに友人のバーデル・ショハンから電報を受け取った。彼はジャカルタに本部をおくインドネシア赤十字の会長で、医薬品を早急に送ってほしいと要請してきたのだった。私たちはインドネシア人在留民たちの間で主として募金と、木綿、羊毛製品、ガーゼ、ほうたい、防腐剤、クリスタルパウダー、解熱剤、下痢止め、ビタミン剤各種などを買い集めて、英国赤十字協会を通じてインドネシアに送った。バーデル・ジョハン博士からは、荷物が無事に到着したという知らせとともに、もっと送ってほしいという電報を受け取った。私たちは早速それに応じた。しかし3回目のときには、どうしたわけか、ジャカルタのインドネシア赤十字との連絡がつかなかった。どうしたのか戸惑っているとき、ジャカルタのインドネシア政府が、ジョグジャカルタに移っていたのだった。私たちはとにかく早めに医薬品を英国赤十字に渡そうとしたが、そちらも連絡がつかないからといって受け取りを拒否した。おそらくオランダ側の差し金だったと思う。私たちは途方にくれた。戦況はますます悪化していた。

私がどうしたら早めに品物を同胞に届けられるかと思案していたとき、友人でインドネシア独立運動に同情的なオーストラリア人のコンスタンチン夫妻が診療所に訪ねてきた。彼ら

は私たちが荷物をジョグジャカルタに送れないでいることを知っていて、援助を申し出てくれた。自分の飛行機で、妻と一緒にジョグジャカルタまで荷物を運んでくれるというのである。そこでアラブ帰りのハジ・アイディンの店でコンスタンチン氏と相談した。氏は人道的な立場から、夫妻そろってこの危険な任務を引き受けてくれるというのである。私たちは夫妻をカラン空港で見送った。飛行機の両翼の上下とボディは、大きな赤十字の印がつけられた。夫妻はにこやかに私たちと握手し、離陸に際してもにこにこ微笑しながら手を振っていた。私たちは心底から飛行機が無事にジョグジャカルタに到着することを祈った。しかし数週間後にどいたニュースはショックだった。コンスタンチン夫妻の飛行機はジョグジャカルタ着陸を目前にして、オランダ軍に撃墜されたという。私たちはひどい衝撃を受け、感動に心を揺さぶられながら夫妻の冥福を祈った。インドネシアはまだ35歳であったコンスタンチン夫妻とそのご遺族に心からの感謝を捧げるものである。インドネシア赤十字協会の活動は、わが親友、オーストラリア人のコンスタンチン夫妻の英雄的な死をもって終りを告げた。

私たちはまたここで、インドネシア独立のために戦い、1949年1月3日にオランダ軍の弾丸によって戦死をとげたアブドゥル・ラフマンこと市来龍夫氏(1906-1949)らの「元」日本人にも深い哀悼の意と感謝の念を捧げるものである。

「インドネシア独立戦争」はもう何十年もシンガポールに住みついているインドネシア人の民族意識を燃え上がらせ、精神的団結をかつてないほど強固にした。シンガポールは英軍の占領下にあり、リアウとスマトラを奪還しようと狙うオランダ軍にとっては、戦略的にきわめて重要な侵略拠点として飛び石の役を果たすものであった。ヘイグ街の“ウィルヘルミナ・キャンプ”ともう1ヵ所、アダム街にあるオランダ軍キャンプには、2000名ほどのオランダ軍の駐屯が許可されていた。彼らの兵士の多くはマルク諸島のアンボン人で、インドネシアの独立に対しては根っからの敵意を抱いていた。人びとは彼らをオランダ人の「アナ・マス(愛児)」と呼んで蔑視していた。

インドネシア人にとって、この2つのキャンプの存在はがまんのできない、呪いのまどであった。インドネシア人たちは、3、4人の小グループで、マレー人の多いゲイラン地区の近くでウィルヘルミナ・キャンプを襲い放火した。深夜、兵隊たちが眠っているとき、焼肉屋の親父が兵舎に石油を投げかけ、それに火をつけたのだった。それが何回か繰り返されて兵舎は焔に包まれた。犯人は捉えられたが軽い刑ですんだ。もう1ヵ所のキャンプは住宅地にあったので「焼肉屋」はそちらの方には何もしなかった。ウィルヘルミナ・キャンプの火焔はインドネシア人の闘争精神のあらわれであり、インドネシアの民族解放運動に同情を寄せるシンガポールの人びとの喝采をあびた。

シンガポールのオランダ人たちはふるえ上った。彼らの商業活動は不振となり、オランダ人街に集中する住宅区域も危険なところとなった。いつ爆弾にやられるかもしれない。英国政府の方でも放っておかず、オランダ人たちのビジネス・センター(総領事館、オランダ国

立銀行、オランダ・ロイド社、エスコムト・オランダ・ハンデレ銀行、K. L. M. (王立航空会社)、K. P. M. (王立郵船会社) その他の主要ビルがある)の近辺にグルカ兵を配置するという措置をとった。フィンレイソン区、ロビンソン街、バッテリー街、アラソカ通りなどで、いつ手榴弾が炸裂するかもしれない。シンガポールのビジネス街では何ヵ月も緊張した空気に包まれた。インドネシア人労働協会と呼ばれたインドネシア人の労働組織は、シンガポール労働組合連合の協力を得てオランダ船の積荷の積み下ろし、積み込みをボイコットした。オランダ船は、インドネシア再占領の目的で禁制品を積んできている、という理由であった。

豪華客船ファン・オランダ号も、いったん入港したものの、沖合遠く退去した。時限爆弾や手榴弾の標的になる恐れがあったからである。ウィルヘルミナ・キャンプに発した焰は、オランダ人商業地区に飛び、そこからさらに海にまで燃え広がったのであった。

シンガポール在住のインドネシア人が英領植民地であるこの土地でオランダ人に挑んだ戦いは、個人的なあるいは少数集団による戦いであったが、その心は「一つの血、一つの肉」というものであった。それと同じ原則に立ってはいたがもっと組織力をもち団結を誇っていたのがインドネシア労働党で、その党員は数千名を擁し、本部事務所はパハン通りにあり、縦10メートル横8メートルくらいの部屋にインドネシアの紅白旗を掲げていた。

私たちの責務は6000万人のインドネシア人の声を、シンガポールのみならず全世界に聞いてもらうことにあった。私は誰にも相談しなかったがニューヨークにできた国際連合に書簡を送るべきだと判断し、シンガポールにおけるインドネシア人の独立精神を手短かに説明するとともに、インドネシア全地域からのオランダ軍の即時撤退の必要性を強調し、同地域の平安と安寧のためにはインドネシア共和国の国際的承認が不可欠であると説いた手紙をしたため、シンガポール在住インドネシア人を代表して署名しニューヨークに送った。

それから約2ヵ月後、シンガポール、中央街141の自宅宛てに国際連合から手紙が届き、私の手紙を受理したこと、そしてその内容は考慮されるであろうことを告げてきた(誰の署名であったかは忘れたが、その便箋の上部には国際連合の紋章が印刷してあったことをはっきり憶えている)。

東京にいたインドネシア人留学生たちも国連に同じような訴えを出した。あの私の手紙は「沈黙の反乱者」からの手紙だったのだ。

何十年というもの沈黙を守ってきたシンガポール在住インドネシア人社会は、各種のインドネシア代表団が海外渡航の途次、何月何日にカラン空港に到着する、というようなニュースを聞くたびに爆発的な興奮に包まれた。ブン(同志の意)・スタン・シャフリル首相の乗った飛行機が着陸したとき、出迎えたのは1000人もの歓迎陣であった。シャフリルが広間に入ってきた瞬間、何と大きな「ムルデカ[独立]」の轟きが響いたことだったろう。何千、何百の手が差伸ばされて握手がかかわされ、外部にはまた何百人の人びとがシャフリルと握手できるのをじりじりしながら待っていた[首相在任中のシャフリルのシンガポール訪問は、

1947年4月、ニューデリーで開催された「アジア関係会議」からの帰途であったと思われる]。

何という喜び、何という拍手、微笑、抱擁だったことだろう。わが友スカイミが、まわりの人びとの助けを借りながらシャフリルを彼の肩にのせて歩き出したとき、この興奮は絶頂に達した。人びとは拍手しながらどっと笑った。ホールの外の人びとも、これでわれらがリーダーの笑顔を見ることができた。これは忘れようと思っても忘れられない瞬間だった。群衆はこぶしを握って空につき出すジェスチャーとともに、「ムルデカ」を三唱し、祈りをこめてシャフリルの成功を祈願した。1949年11月、ハーグで開かれた円卓会議に出席した帰途、シンガポールに立ち寄ったハジ・アグス・サリム、ブン・タムジルおよびハッタ代表団も、同じように嵐のような歓迎を受けた。群衆はみな、誰にも命令されず自発的に集ってきた人びとだった。それはシンガポール在住インドネシア人社会の祖国に対する真の愛の表現であった [シンガポールにおけるインドネシア民族主義運動については、以下を参照。Yong Mun Cheong, “Indonesia’s Singapore Connection, 1945～1948,” Taufik Abdullah ed., *The Heartbeat of Indonesian Revolution* (Jakarta: Gramedia Pustaka Utama, 1997.)]。